

享受される海洋文化——伝説・楽園・異界——

The Development of Maritime Cultures, Legends, Paradise, and the Other World

目次

序文にかえて	畑 恵里子	9
第一部		
パネルディスカッション「海洋文化としての伝説・楽園・異界」		19
Legends, Paradise, and the Other World, As Maritime Cultures		
一 趣意文	畑 恵里子	21
二 基調報告 一		
丹後の海と浦島のいま		
Tango Sea and Urashima Today	小山 元孝	25

京丹後市の概要／丹後の海の姿―泡にまみれた道路（京都府京丹後市丹後町）・砂にまみれた道路（京都府京丹後市網野町）・鮮魚店店頭（京都府京丹後市網野町）・広通寺薬師如来坐像（京都府京丹後市網野町）・福島神社（京都府京丹後市久美浜町）・上山寺（京都府京丹後市丹後町）・竹野神社（京都府京丹後市丹後町）――浦島のいま―

釣溜（京都府京丹後市網野町）・福島（京都府京丹後市網野町）・浦島見宅伝承地（京都府京丹後市網野町）・浦島太郎出生地（京都府京丹後市網野町）・水無月祭（京都府京丹後市網野町）・しわ榎（京都府京丹後市網野町）――

三 基調報告 二

海の女性がもたらす力――記紀神話と『源氏物語』における皇族と海族の結婚

Power of the Sea Goddesses: How the Mytho-histories of Japan and the Tale of Genji Represent the Intermariages of the Royal Men and the Women of the Undersea Kingdom シュミット 堀 佐知 35

はじめに／貴種流離譚とは／異界としての海／山幸彦伝説／『源氏物語』／玉依姫と紫の上について

四 基調報告 三

ポーランドの琥珀

Amber in Poland 園山 千里 43

Jurassic Park ジェラシックパークの琥珀（こはく・Amber）から――琥珀の定義・バルト海沿岸の琥珀・ポーランドの琥珀に関する話『バルト海の女王』――琥珀が登場する小説――辻村深月『琥珀の夏』より・大庭みな子「炎える琥珀」より・ギリシャ神話 オウイディウス『変身物語』巻二から パエトンの姉妹「太陽の娘たち（ヘリアデス）」・Tajemnice bursztynu『秘密の琥珀』Barbara Kosmowska-Ceranowicz 著（一九八九年）――海を舞台とする神話・伝説からみえてくる琥珀の表象

五 フロアからの質疑応答 53

丹後の海の波の花／浦嶋神社の絵解き／日本の琥珀に関する伝説の稀薄性／話型の再生産^{タイプ}

六 アフタートーク 61

シュミット 堀 佐知
園山 千里
畑 恵里子

基調報告での意図・戦略／現在も生きている丹後の浦島伝説／異界しての海と海幸・山幸伝説／守るべきものとしての海の宮殿／仏典の想像上の宝物としての琥珀／海と性差／海中の宮殿へ連れてゆく話型と連れてこない話型／丹後に点在する浦島史跡／丹後の皺榎の伝承／皺榎の背景／丹後で発生したあらたな浦島伝説／海底の異界と山の異界との対比／おわりに

第二部 論 考 85

一 しわ榎の源流――浦島子をめぐる信仰史の一断面――
The Origin of the Shiva Enoki: A History of the Belief in Urashimako 小山 元孝 87

一 はじめに／二 もう一つのしわ榎／三 浦島明神と霊木／四 二つの「しわ榎」の関係／五 おわりに しわ榎のいま	
--	--

二 海の女神・巫女・「めのと」——タメヨリビメの流動的な性について

The Sea Goddess, Shamanes, Erotic Mother: Princess Tamayori and Her Fluid Sexuality シュミット 堀 佐知	105
一 はじめに／二 海幸山幸伝説と海神の女たち ^{むすめ} ／三 山幸彦・トヨタマビメ・タメヨリビメの関係／四 性愛・生殖・政治のあわい／五 「めのと」としてのタメヨリビメの性／六 おわりに	

三 海と森をつなぐ琥珀の輝き

The Shine of Amber connecting the sea to the forest 園山 千里	129
一 はじめに／バルト海の琥珀から／二 漁師を愛した女王ユラタの悲劇／三 よみがえる樹の雫／四 琥珀となった姉妹の涙／五 流れ落ちる人間の涙／六 おわりに	

四 アンケートから見る浦島伝説の享受の一様相

An aspect of the enjoyment of Urashima Legend of seen from the questionnaire 畑 恵里子	149
一 はじめに／二 アンケートの目的と項目／三 一般の人々にとって昔話や伝説にあたる作品／四 昔話 や伝説の享受の経路／五 浦島伝説の認知度・人気度・縁起度／六 浦島伝説・『桃太郎』・『竹取物語』／七 おわりに	

あとがき	畑 恵里子	173
------------	-------	-----

執筆者紹介		179
-------------	--	-----

序文にかえて

本書は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)「海洋文化圏から見る浦島伝説の宗教観」(研究課題／領域番号 21K00294 研究代表者 畑 恵里子)の研究成果の一部として開催したパネルディスカッションを主軸とした内容である。そのため、書名からはすぐにそれとはわからないのだが、浦島伝説が背景となっている。古代に記録され、全国各地に類話を持ち、現代もお親しまれている息の長いこの伝説では、いわゆる龍宮という名を持つ海の異界が重要な要素となる。

それにしても龍宮とはどのような異界であるのか。そしてどこにあるのか。

浦島伝説の最古の記録は、『万葉集』(巻九・一七四〇番歌、一番「詠水江浦島子一首并短歌」高橋虫麻呂)や『日本書紀』(雄略天皇二二年秋七月条)といった上代の資料である。そのうち、比較的詳述しているのは『丹後国風土記逸文』であり、そこでは、「水の江の浦の嶋子」たる浦島と、「亀比売」いわゆる乙姫による結婚が主となっていて、神仙思想が色濃い。「海中」で釣り上げた「五色の亀」が女性の身体に転じ、その導きを受けて、浦島は眠りを通じて「蓬山」^{しんよのくに}、「仙都」^{とこよ}、「神仙の堺」^{とこよのくに}という、いわゆる龍宮を訪れて歓待を受ける。植垣節也は「この「海中」は海上の意。海の遙か彼方を思い描いている」(新編日本古典文学全集『風土記』四七六頁頭注)と説明している。その場合、水平線のかなたに位置する海の異界といえよう。平安時代成立の『続浦島子伝記』(『群書類従』所収)には「万里の波の上を済りて」(重松明久『浦島子伝』現代思潮新社、一九八一年)とあり、これも、水平線の先に龍宮が誘起されるように考えられる。『浦島子伝』(『群書類従』所収)も『続浦島子伝記』と近似している。いずれも、海の神のむすめである「霊亀」と結婚する浦島が居住することとなった龍宮について、宝玉や珊瑚等がふんだんに使用された絢爛たる

宮殿であることが、漢文体で精緻に説明されている（重松明久『浦島子伝』前掲書）。

時代がくだると、仏教の影響によって、それまでとは様相が異なる箇所が生じてくる。『今昔物語集』巻一六第一五「観音に仕る人竜宮に行きて富を得る語」は、浦島と同じく龍宮が舞台となる異界訪問譚である。男が命を助けた「小蛇」が女体に転じて、「小池」を通じて男を異界へといざない、そこで歓待を受けた男は餞別を得て、地上へ帰った後もそのおかげで富を得続けたという内容である。そこは「極楽」にも似た、壮麗な「龍王の宮」であったという。「仏教では大海の底にあって、『一切経』を収蔵する宮城で、仏法護持の竜王の居城」（新編日本古典文学全集『今昔物語集』二〇五頁頭注。頭注は主に稲垣泰一）というのだから、龍王の支配する海底の世界が「小池」の先にあるという設定と見てよいであろう。仏教の影響下による、海の中の垂直下方に位置する異界となる。『宇治拾遺物語』巻一二第二二「陽成院ばけ物の事」でも、「大きな池」の「主」で「浦島が子の弟」と名乗る「浅黄の上下着たる翁の、殊の外に物わびしげなる」という超自然的存在が登場している。

大乘仏教として代表的な経典のひとつである『法華経』では、「提婆達多品」に「従於大海娑竭羅龍宮自然涌出」とあり、娑竭羅龍王のむすめである龍女りゅうにょによる法華経護持と変成男子による成仏の過程とが示されている（坂本幸男・岩本裕 訳注『法華経 上・中・下』岩波文庫、一九六二年。植木雅俊 訳『サンスクリット原典現代語訳 法華経 上・下』岩波書店、二〇一五年。植木雅俊 訳『梵漢対照・現代語訳 法華経 上・下』岩波書店、二〇一八年）。龍という畜生の属性の他、女という性、幼年の子どもという幾重もの負の属性を持っているため、龍女は、本来ならば成仏に最も遠いはずであったのだが、そうした存在でさえ、法華経を受持して実践すれば成仏は可能であるとして、その功德を説いている。よって、同じ龍宮でも、異界の美しい神女との突然の結婚を語る浦島伝説とは相当に相違しているのだが、龍王という支配者のいる日常性を超越した海中の異界という点は共通している。

『御伽草子』の『浦島太郎』になると、龍宮の四方に四季が配されるようになる。春から冬にかけての美しい四つの景色が同時に存在しており、浦島は乙姫の案内のもと、それらを堪能している。地上とは時間の流れが相違するところが、季節の並列によって付加されていく。

近世になると、一層、理想的世界の形容のもとに、龍宮は表現されるようになる。龍宮の現在のイメージは、近世前期から近世後期にかけて定着したものであると、林晃平は指摘する（林晃平『浦島伝説の展開』おうふう、二〇一八年）。草双紙の一種である黒本の舞鶴市糸井文庫蔵『水江浦島 対紫雲篋』では、歓待を受ける龍宮の素晴らしさが「喜見城」と叙述されている（明和八（二七七）年。舞鶴市へ掲載許諾確認済。詳細は、畑恵里子編『平成二九（二〇一七）〜令和二（二〇二〇）年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号17K02438「舞鶴市糸井文庫蔵浦島伝説関連資料の基礎的研究」研究成果報告書―伝説と文学とについての越境論的提言―A Basic Study on Primary Sources related to Urashima Legend in the possession of Itoi Bunko Library in Maizuru City ― A Proposal for Cross-border View of Legend and Literature ― 静岡英和学院大学人間社会学部人間社会学科畑恵里子研究室、二〇二一年）。『喜見城』とは仏教用語であり、天人が遊ぶという帝釈天の居城で須弥山の山頂にあるとされていて、善見城とも言う。転じて、近世ではいわゆる花街を指す場合がある。本作品では理想郷として、あるいは、やや卑属で享樂的な空間のひとつとして、「喜見城」と表現されていると解しうる。この場合、世界中心的な地にあたる須弥山にあるというのだから、海底というよりも、どちらかといえば海上の印象が強いように考えられる。

近代になると、『古事記』の翻訳等で知られるバジル・ホール・チェンバレンが手がけている縮緬本（英語版）の『THE FISHER・BOY URASHIMA』（長谷川武次郎、『日本昔噺 第八号 浦島』、弘文社、明治一九（一八八六）年）では、浦島が龍宮へ向かう際の叙述に際して「the Dragon Palace beyond the deep blue sea」等の表記をとっている。そのため、龍宮が水平線上に存在しているという理解のもとに、チェンバレンは「beyond」を選択したことになる。併せて、「beyond」からは、異界の超越性を示唆しているようにも読める。同書には、舟先の松原の先に龍宮がデザインされ

ている挿絵が採用されている。この絵柄からも水平線のかなたにある海の異界という印象が植え付けられる内容となっている。

このように、龍宮とは超自然的存在の住まう海洋の異界であるのだが、人間にとって恐懼や不安を誘引するようなものではなく、理想的で享樂的な楽園としての側面が押し出されている点が特徴のひとつとなっている。そしてその場所は、海の底とも水平線のかなたともされていて、一定していない。

そういえば、浦島伝説に限らず、日本文学・日本文化では、超自然的存在と人間との接点を持つ舞台として、海や海岸がしばしばえがかれてきた。

たとえば、『駿河国風土記逸文』の天女伝説では、「神女」いわゆる天女が「漁人」と出会うのは、「北」に「富士山」、「南」に「大洋海」、「西」に「久能山」という地形に臨む、「松林」の茂る「三保の松原」である。「三保の松原」は現在の静岡県静岡市清水に位置しており、太平洋の駿河湾を背景とする。もともと、植垣節也は「古風土記の逸文とは認められない後世の風土記の断片等」（新編日本古典文学全集『風土記』五六六頁頭注）としてもいる。とはいえ、駿河国の三保の松原は能楽「羽衣」で取り上げられているように、天女にまつわる代表的な地として伝えられてきたと見てよい。この場合の異界は「天」や「雲」、つまり垂直上方となる。「天」からきた「神女」を語る際に、「大洋海」と「富士山」とが背景として選び取られている。この場合の異界は「天」だが、超自然的存在と出逢う場所としては「松原」、つまり海岸となる。そういえば三島由紀夫も、『豊饒の海』の最終巻『天人五衰』で、三保の松原を舞台のひとつに設定していた。こうした海洋にあるとされている異界へのまなざしを考える場合、たとえば、柳田国男の「海神宮考」が示唆的である。龍宮と沖繩のニライカナイとの関わりの他、記紀神話の海幸山幸や根の国等、海洋にある異界の様相が取り上げられている（柳田国男『海上の道』筑摩書房、一九六一年）。本土とは色彩の異なる豊かな文化を示してくれる好例は、やはり奄美・沖繩であろう。そこに伝わる最古の歌謡集『おもろさうし』では、

「ニライカナイ」という神の世界の理想郷が、東方の海のかなた等にあるとされている。水平線の向こう、つまり平行之先の世界となる。沖繩は琉球王国という本土とは別の形態の国家であり、聞得大君、いわゆるノロという女性の祭司者が、男性の国王を宗教的側面から補佐していた。『おもろさうし』は宗教的要素も含まれる歌謡集であり、そこにはノロの姿も垣間見える。奄美・沖繩の海洋の伝説は、太平洋とも日本海とも異なる独自性を持つ。

それにしても、これら海を舞台とする理想郷たる異界の文学的表現方法には、いったいどのような特徴があるのか。海洋が異なれば取り巻く環境も異なるのであるから、影響関係は少なからずあろう。風土が孕む独自性は、文学や文化の理解のためには留意しておくべき要素のひとつであると、かねがね認識してきた。そこで海ごとに切り分けて、楽園としての異界がどのように表現されているのかを比較して、海洋文化という視点から考察を深める試みを持ちたいと考えた。それに、日本文学や日本文化を知るには、外部からのまなざしや比較は不可欠であり、他文化を知ることによって、日本の古代の伝説への理解を深めることが可能となる。ことに浦島伝説の場合、上代から現代に至るまで享受され続けてきた数少ない文学作品という特徴を踏まえれば、異界や超自然的存在をえがく本伝説は、日本文化における宗教観の一端を探りうる好材料となるはずだ。

ただし、浦島伝説は、時代によって揺れが見られる。

先に触れたように、古代では「蓬山」、「仙都」、「常世」等と表記されており、中世に「竜宮浄土」との表記をとるようになる（『室町物語草子集』『浦島の太郎』新編日本古典文学全集）。龍宮あるいは龍宮城という言葉は、当初から見られたわけではない。古代では、浜辺で亀を加害している子どもたちは登場せず、亀を助けた浦島への報恩譚の要素もない。亀はいわゆる乙姫へと転身して海の世界へといざない浦島と結婚することから、古代では恋物語の側面が色濃い。中古・中世でも「浦島が箱開けて悔しき」（『室町物語草子集』『浦島の太郎』新編日本古典文学全集）等のような悔恨の表現は見られるのだが、そのかたわら、縁起物としての側面が明確に付与されるようになっていく。同作

品の末尾では、浦島は「鶴」に生まれて「亀」と対になり、「君が代は千代に八千代をさざれ石の巖となりて苔のむすまで苔のむすまで」との和歌をもつて締めくくられている。近世では、草双紙の一種である黒本の舞鶴市糸井文庫蔵『風流新版 竜宮曾我物語』(明和八(一七七二)年。舞鶴市へ掲載許諾確認済。詳細は、畑恵里子編『平成二九(二〇一七)〜令和二(二〇二〇)年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号17K02438「舞鶴市糸井文庫蔵浦島伝説関連資料の基礎的研究」研究成果報告書―伝説と文学とについての越境論的提言―A Basic Study on Primary Sources related to Urashima Legend in the possession of Itoi Bunko Library in Maizuru City ― A Proposal for Cross-border View of Legend and Literature―』(前掲書)のように、新春を言祝ぐ曾我物歌舞伎と融合して上演されたり、翁であることから長寿にあやかったりする等、祝祭の意味を一層強めるようになる。

浦島伝説は享受層も時代によって推移している。伊預部馬養によって創作されたという浦島伝説は、当時、性愛が押し出された刺激的な作品として貴族層に伝えられてきたという(三浦佑之「浦島太郎の文学史―恋愛小説の発生―」五柳書院、一九八九年)。それは次第に、着実に、一般の人々の間へと浸透してゆく。後世の嫁入本や歌舞伎はそれに一役買ったであろうし、近代以降は明治期国定教科書に採用されたことから、教育現場を通じて全国的に伝播するようになってゆく。小説家・児童文学者である巖谷小波(生年 明治三(一八七〇)年〜没年 昭和八(一九三三)年)の関与した明治期の国定教科書所収「ウラシマノハナシ」は、均質的内容が全国に伝播する契機となったのであるから、教科書の影響は甚大であった(三浦佑之「浦島太郎の文学史―恋愛小説の発生―」、前掲書)。

現在も浦島伝説は市井の人々に愛好されている。ただし、恋物語でも、縁起を担ぐものでもないであろう。語彙も展開も相違する。そのため、研究対象という視点で照射すると、幼少時から親しむ機会の多かったはずの浦島伝説は、途端に扱いが困難な作品へと転じてしまう。

しかしながら、日本文化の宗教観を探る指標としては、この伝説は有益であり、魅力的である。そこで海洋文化圏

の異界表現という視座から柔軟に考えてみる機会を作ってみたいと考えた。それはパネルディスカッションへ、そして本書へと結実していくこととなる。

さて、本書は、第一部・第二部という二部構成となっている。

第一部では、パネルディスカッション「海洋文化としての伝説・楽園・異界 Id, As Maritime Cultures」および、そのアフタートークを所収している。

本企画の一つ目の目的は、浦島伝説をひとつの軸として、海を舞台とする異界へのまなざしが、作品によって、あるいは地域によって、どのように異なっているのかを探ることにある。海外に拠点を置く研究者や、丹後地域の浦島伝説に精通している歴史学の研究者とのセッションによって、これまでにないあらたな糸口を見つけることになった。二つ目の目的は、パネルディスカッションの参加者を対象とするアンケートを実施して、浦島伝説の享受の実態の一端を探ることにある。浦島伝説は現在も市井の人々に愛好されているが、どこから享受しているのか。現在は、おそらく教科書そのものの影響は考えにくいのではないか。学校教育とは別の享受の経路を探る方策を思案した結果、参加者を対象とするアンケートの実施が有益ではないかと想起した。それは伝統的な日本文学の研究方法からの逸脱となる。しかし、現在の浦島伝説の享受を探るためには有意義に機能するに違いないと確信した。幸いなことに、性格心理学・教育心理学を専門とする静岡英和学院大学の林智幸氏の協力を得ることができた。静岡県の一地域で収集したデータである以上、ある種の偏重はあろう。そこには日本語を母語としない留学生の回答も含まれる。それでも、享受の様相を探るための、ひとつの糸口となるはずだ。

前例のない試みという点では、本書に所収しているアフタートークも挙げられよう。日本文学研究では、従来、パネルディスカッション後は、パネリストが執筆した単著論文を、学術雑誌や書籍に一括掲載するパターンが多い。だが、本企画では、パネルディスカッションの後でパネリスト間の意見交換や議論も含めることにした。本来、アフ

タートークとは、演劇の公演後等に、出演者や演出家等が行う比較的小規模な座談会である。今回敢えてこの言葉を用いたのは、市井の人々へ本事業を開催した後、研究者同士で改めて基調報告の背景等を明らかにしたうえで、各自の専門性を踏まえたやりとりを行ってみたかったということにある。諸事情により、残念ながら一般参加者の前でのやりとりはできなかったが、従来の研究方法にとられない方法を、同世代の研究者の協力のもとに挑戦してみたいと考えた。これが三つ目の目的である。

第二部では、パネルディスカッションを踏まえた単著論文を所収している。

地域史・宗教史を専門とする小山元孝氏は、丹後地域独自の浦島伝説の史跡、ことに「皺榎^{しわえのき}」と呼ばれている樹木に焦点をあてている。地上で玉手箱を開けた浦島が顔の皺をひきちぎって投げつけたといういわれを持つ皺榎を、地域の人々がどのように引き継いできたかを、当地の資料と共に提示してくれた。

アメリカに拠点を持つシュミット堀佐知氏は、記紀神話のトヨタマヒメやタマヨリヒメに焦点をあてて、『源氏物語』を分析している。光源氏の血の繋がった一人娘を産み出す明石の君は、海にゆかりの深い一族であり、光源氏の潜在王権に影響を与えた人物の一人となる。生みの母の明石の君と育ての母の紫の上、両者の対比は従来指摘されてきた中、堀氏は記紀神話を通じて新たな知見を提示してくれた。

日本とポーランドとに拠点を持つ園山千里氏は、バルト海を中心として、琥珀が誘引する当地の物語や神話を論じている。以前も園山氏は、ポーランドではドラゴンをめぐる話が市井の人々に親しまれていることを提示してくれた（日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「舞鶴市糸井文庫蔵浦島伝説関連資料の基礎的研究」（研究課題／領域番号 17K02438 研究代表者 畑 恵里子）。現在の日本では龍王の存在感はさほどではないのだが、近世までは、乙姫の父親であり海の支配者たる龍王は看過できない存在感を放ってきた。

わたくしは、アンケート分析結果の数値を踏まえて、現在の浦島伝説の享受の様相の一端を考えてみた。現在のわ

たくしたちは、どのような側面から浦島伝説を享受しているのか。学校等による公的領域からの享受と、家族等による私的領域からの享受との相違等、実態を再確認する機会となるであろうと考えた。従来の日本文学研究の方法とはまったく異なる新たな試みであるだけに苦慮したが、得がたい経験となった。

本書が何らかの問題提起となることがあれば幸いである。

令和四（二〇二二）年 秋晴れの気配が満ちる眩しい日本平の池田山で

立案・コーディネーター・編集 畑 恵里子